からゆきさん時代の再来

歴史の荒波の中で苦難を強いられ、シンガポールの地で眠る「からゆきさん」たち。
現地の日系クリニックを訪れる駐在員には、彼女らに自らを例える患者も多い。

シンガポール　ラッフルズジャパニーズクリニック
医師　日暮 真由美

当地で眠る女性たち

「からゆきさん」とは、明治から昭和初期にかけて外国へ連れて行かれ、娼婦として働かされた日本人女性たちのことだ。しかし、もともとは九州弁で「唐(中国)へ行く人」を意味し、当初は海外に出稼ぎに行く人を男女や職種を問わず、「からゆきさん」とか「からゆきどん」と呼んでいたらしい。日本にまだ貧しい地域が多かった時代、海外出稼ぎや移民は生き延びるための一つの働き方だった。

しかし、娼館で働かされたからゆきさんのほとんどは人身売買か、「海外で良い仕事がある」とだまされて連れてこられた、まだ十代の少女たちであった。不衛生な環境で、20歳前後で亡くなる人も多かったらしい。家族への仕送りや借金返済のため、貧困と過酷な労働に苦しみ、やっと帰国できてもひどい差別が待っていたという。

1890年頃　シンガポールのからゆきさん（ライデン大学所蔵）

1900年頃のシンガポールには日本人が1000人ほど住んでおり、900人以上がからゆきさんだったと記録されている。不幸な少女たちは亡くなると、獄死者や牛馬の遺骨と一緒に埋葬されたが、後年、これを不憫(ふびん)に思った日本人が改葬し、これが現存するシンガポール日本人墓地公園の始まりとなった。からゆきさんと分かっているものだけでも400基以上の墓石があり、歴史の荒波の中で当地で一生を終えたその他大勢の日本人と共に眠っている。現在、シンガポール日本人会、日本人学校等が管理・整備に尽力しており、シンガポールに住む日本人にとっては、からゆきさんは遠い存在ではない。

シンガポール日本人墓地公園　からゆきさんの墓標のある一画

「自分はからゆきさんだ」と嘆く患者

実は時々、「自分はからゆきさんだ」と語る患者さんに会うことがある。もちろん娼婦ではなく、海外駐在員である。サラリーマンの花形で、手厚い手当や華やかなイメージのあるはずの駐在員が、なぜ自分をからゆきさんに例えるのだろうか。